

教育研究業績書

令和5年5月1日

氏名 吉田徳之



教育上の能力に関する事項

事項	年 月	概要
1 教育方法の実践例		
(1) 講義及び実習の担当科目 (大阪市立大学)	2003～2006年	担当科目：化学 B、生物化学実習、生体機能解析学(講義、分担) パワーポイントによるスライドに加え、ビデオ教材を併用することで単調な講義を回避し、学生に質問をして理解度を把握しながら講義を進める工夫をした。
(2) 講義及び実習の担当科目 (立命館大学)	2013～2018年	担当科目：生化学実習 2(免疫学・組織学実習)、微生物学実習、分子生物学実習、生化学実習 1、衛生化学実習 1・2、薬理学実習、生薬学実習、天然物化学実習、分析化学実習 1・2、英語 JP1(演習)、生命科学(講義)、卒業研究 1・2(分担)、薬局実習 学生に質問をして理解度を把握しながら実習を進める工夫をした。また、講義に対する質問をweb上で回収後、次の講義で回答した。
(3) 講義及び実習の担当科目 (甲子園大学)	2020年～	担当科目：【栄養学科】生物学Ⅰ、生物学Ⅱ、生理学(2022年)、基礎セミナーⅠ(2020年、2022年)、専門セミナー、特別演習(2022年)、解剖学・病理学実習(2022年)卒業研究【フードデザイン学科】生物学Ⅰ(FD)、生物学Ⅱ(FD)、食資源生産学、環境衛生学実験、外書購読【現代心理学科】生命科学(2020～2021年)【全学科】生命倫理、学生生活入門Ⅱ(2022年) 2020年から新型コロナウイルス感染拡大により学生の登校が制限されることがあり、その際には、オンラインにより授業を行った。また、授業で用いた確認テストや動画を含めた資料をWeb上にアップロードすることにより学生の自主学修を促進した。オンラインでも、学生に質問をして理解度を把握しながら授業を進める工夫をした。
2 作成した教科書・教材		
(1) 講義及び実習の担当科目 (大阪市立大学)	2003～2006年	担当科目について、それぞれ説明するスライドを作成、配布し、テキストとして使用した。最新のトピックに関して毎年改訂した。
(2) 講義及び実習の担当科目 (立命館大学)	2013～2018年	担当科目について、それぞれ説明するスライドを作成、配布し、テキストとして利用した。薬剤師国家試験などは毎年更新して説明時に適宜用いた。
(3) 講義及び実習の担当科目	2020年～	担当科目によっては、教科書以外に補足の説明をするスラ

様式第4号（教員個人に関する書類）

(甲子園大学)		イドを作成、配布し、テキストと併用して利用した。管理栄養士国家試験などは毎年更新して説明時に適宜用いた。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
(1) 学生による授業評価 (立命館大学)	2013～2018年	科目毎に行われる授業評価では、肯定的な評価が得られ、特に「説明がわかりやすかった」「スライドや板書が見やすかった」が8割以上であった（生命科学）。
(2) <u>学生による授業評価</u> (甲子園大学)	2020年～	科目毎に行われる授業評価アンケートでは、肯定的な評価が得られ、特に「先生の丁寧な説明がわかりやすい」「授業後に課題プリントを配布してもらえて復習の時にとっても役立つ」のように、授業の進め方に関して全般的に評価が高かった。また、オンライン授業の初期には、教員と学生共に不慣れであったが、試行錯誤により改善に努めた。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
(1) 交流イベント「ゲノム広場」への出展 (大阪市立大学)	2004年8月	ゲノムひろばとは、最先端のゲノム研究を研究者自らが一般の方に伝え、問いに応えるという双方向のイベントである。出展者としてポスターの前に立ち、一般の方にサイエンスを理解していただくよう努めた。（タイトル「ヒトゲノムのがらくたの中の掘り出し物」）
(2) 福島県立磐城高等学校講師 (東北大学)	2012年10月	大学の教員による学問の最先端に触れる講義を生徒に体験させることによって、大学での研究・学習に対する興味・関心を高め、進路意識の高揚を図った。
(3) 理系デモンストラーションディの研究室公開（立命館大学）	2013年7月	立命館守山高校の高大連携事業の一環として、高校1年生を対象に理工系学部の学びを知り、これからの社会における役割を知る機会にするため、研究室公開を行った。
(4) 高校訪問（ガイダンスを含む）（甲子園大学）	2020年～ (随時)	高校を訪問することで、各高校を母校とする甲子園大学在校生の近況報告、および、オープンキャンパス・大学紹介により甲子園大学への受験促進に努めた。また、ガイダンスでは、栄養学部で学べる内容・特色や入試、就職、取得資格などについて説明した。
5 その他		特記事項なし
職務上の実績に関する事項		
事項	年月	概要
1 資格、免許	1983年11月 1986年8月 2000年3月	全国珠算教育連盟珠算検定第一級 実用英語技能検定3級取得 博士（理学）（北海道大学）

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

2	学校現場等での実務経験					上記「教育上の能力に関する事項 1」と同様
3	実務の経験を有する者についての特記事項					上記「教育上の能力に関する事項 4」と同様
4	その他					特記事項なし
担当授業科目に関する研究業績等						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数 (総ページ数)	概要
生物学、解剖学、生理学、生理学実習、解剖学・病理学実習、特別演習、卒業研究、食資源生産学、環境衛生学実験、外書購読、生命科学、生命倫理	(学術論文) (原著) 1 Predicted markers of overall survival in pancreatic cancer patients receiving dendritic cell vaccines targeting WT1.	共	2019 年	Oncology , 97: 135-148.	(抽出不可)	多くの癌種で発現する転写因子である WT1 を標的としたがんワクチン療法と標準化学療法を組み合わせた治療法を進行性膵管腺癌 (PDA) 患者に対して行った。その結果、治療初期後の好中球/リンパ球比、単球/リンパ球比、顆粒球/リンパ球比の全身性炎症反応の長期にわたる低下および膵癌組織での細胞質 WT1 発現の低下は、WT1 標的免疫化学療法を受けた PDA 患者の全生存期間を予測するマーカーである可能性を示唆した。 著者: Zensho Ito, Shin Kan, Tsuue Bito, Sankichi Horiuchi, Takafumi Akasu, Mikio Kajihara, Sayumi Yoshida, Atsushi Hokari, Masayuki Saruta, <u>Noriyuki Yoshida</u> , Masanori Kobayashi, Toshifumi Ohkusa, Shigetaka Shimodaira, Masato Okamoto, Haruo Sugiyama, Shigeo Koido (執筆担当部分: 抽出不可)
	2 The cleavage program in the 2d cell lineage of <i>Tubifex</i> embryo.	共	2019 年	J. Morphol. , 280: 568-586.	(抽出不可)	環形動物の一種であるイトミミズの初期発生は不等らせん卵割である。その過程で生じる 2d 細胞からは進化的に保存された細胞分裂を経て、胚性幹細胞として機能する 4 対の外胚葉性芽細胞が形成される。本論文では、2d 細胞から外胚葉性芽細胞が形成されるまでの 15 回の細胞分裂を形態的、免疫細胞学的手法などを用いて特徴付けした。特に細胞系譜における不均卵割、等卵割における細胞分裂面と細胞分裂装置の方向の関係性、さらに、6 つの他種環形動物を含めた不等らせん卵割について比較検討しながら議論した。 著者: <u>Noriyuki Yoshida</u> , Asuna Arai,

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>3 Interferon-α competing endogenous RNA network antagonizes microRNA-1270.</p>	<p>共</p>	<p>2015 年</p>	<p>Cell. Mol. Life Sci., 72: 2749-2761.</p>	<p>(抽出不可)</p>	<p>Momoe Aoki, Miho Moriya, Kaho Sekiguchi, Takashi Shimizu (執筆担当部分：抽出不可)</p> <p>IFN-α 1 AS RNA に加え、IFN-α 7, 8, 10, 14 AS RNA、IFN-α 8, 10, 14, 17 mRNA 及び CAPRIN1 等の細胞 mRNA 分子がネットワークを形成し、これらが ceRNA として miR-1270 に拮抗することを見出した。この協働により、IFN-α 1 mRNA は miR-1270 による抑制を免れ、転写後性に安定化されることを示唆した。この ceRNA ネットワークは、転写後性発現調節機構を介して適切に生理学的 I 型 IFN レベルを維持する上で重要な役割を果たしていることを示唆した。</p> <p>著者：Tomonori Kimura, Shiwen Jiang, <u>Noriyuki Yoshida</u>, Ryou Sakamoto, Mikio Nishizawa (執筆担当部分：抽出不可)</p>
	<p>4 Randomized trial of preoperative docetaxel with or without capecitabine after 4 cycles of 5-fluoracil-Cyclophosphamide (FEC) in early stage breast cancer.</p>	<p>共</p>	<p>2013 年</p>	<p>Breast Cancer Res. Tr., 142: 69-80.</p>	<p>(抽出不可)</p>	<p>477 人の手術可能な乳癌におけるフルオロウラシル/エピルビシン/シクロホスファミド (FEC) 療法後のドセタキセルに加え、カペシタビンの有無の有効性を比較し、予測バイオマーカーとしての Ki67 の役割を検討した。病理学的完全奏効 (pCR) 率、無病生存率、または全生存率には有意差はなく、4 サイクル FEC 後のドセタキセル/カペシタビンは、ドセタキセル単独と比較して pCR に有意な改善をもたらさなかった。しかしながら、治療前の Ki67 評価は、早期乳癌の術前ドセタキセル/カペシタビンに対する応答患者を予測するのに有用な指標である可能性が示唆された。</p> <p>著者：Shinji Ohno, Louis WC Chow, Nobuaki Sato, Norikazu Masuda, Hironobu Sasano, Fumiaki Takahashi, Hiroko Bando, Hiroji Iwata, Takashi Morimoto, Shunji Kamigaki, Takahiro Nakayama, Shigeru Murakami, Seigo Nakamura, Katsumasa Kuroi, Kenjiro Aogi, Masahiro Kashiwaba, Hiroko Yamashita, Kazufumi Hisamatsu, Yukashi Ito, Yutaka Yamamoto, Takayuki Ueno, Elham Fakhrejehani, <u>Noriyuki Yoshida</u>, Masakazu Toi (執筆担当部分：抽出不可)</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

<p>5 Progesterone induced mesenchymal differentiation and rescued cystic dilation of renal tubules of <i>Pkd1</i>^{-/-} mice.</p>	<p>共</p>	<p>2012 年</p>	<p>Biochem. Biophys. Res. Commun., 425: 212-8.</p>	<p>(抽出不可)</p>	<p>染色体優性多発性嚢胞腎疾患 (ADPKD) は、症例の 85% が PKD1 遺伝子の突然変異によって引き起こされる。本論文では、PAX2、WNT4、および WT1 をマーカーとして間葉系分化の評価を行い、<i>Pkd1</i>^{-/-}マウスの嚢胞形成に先行することを明らかにした。腎臓器官培養を行ったところ、プロゲステロンとその誘導体が間葉分化を促進し、<i>Pkd1</i>^{-/-}マウスの嚢胞腎形成を部分的に防いだ。また、プロゲステロンとその誘導体の妊娠マウスへの腹腔内注射は、<i>Pkd1</i>^{-/-}マウス胚の生存を改善した。これらの結果は、腎形成において間葉分化を促進する化合物が、ADPKD 患者の嚢胞形成を予防する治療に有用であることを示唆した。 著者：Tomoka Wachi, <u>Noriyuki Yoshida</u>, Yoshihiko Funae, Munehisa Ueno, Gregory G. Germino, Shinji Hirotsune, Nobuhiro Deguchi (執筆担当部分：抽出不可)</p>
<p>6 Prognostic significance of tumor/stromal caveolin-1 expression in breast cancer patients.</p>	<p>共</p>	<p>2011 年</p>	<p>Cancer Sci., 102: 1590-1596.</p>	<p>(抽出不可)</p>	<p>カベオリン 1 は乳癌において癌抑制遺伝子として知られているが、その発現と治療成績や予後との関連は知られていない。免疫組織学的染色により、乳癌組織において、カベオリン 1 が癌細胞に高発現し、間質に発現しない場合に、治療成績と予後が悪いことを示唆した。 著者：Niansong Qian, Takayuki Ueno, Nobuko Kawaguchi-Sakita, Masahiro Kawashima, <u>Noriyuki Yoshida</u>, Yoshiki Mikami, Tomoko Wakasa, Masayuki Shintaku, Shigeru Tsuyuki, Takashi Inamoto and Masakazu Toi (執筆担当部分：抽出不可)</p>
<p>7 NDEL1 is a target of Aurora-A kinase, which plays an essential role for centrosome maturation and separation, and TACC3 recruitment.</p>	<p>共</p>	<p>2007 年</p>	<p>Mol. Cell Biol., 27: 352-367.</p>	<p>(抽出不可)</p>	<p>NDEL1 は LIS1 の結合パートナーで、分裂装置の形成や神経細胞の移動に関与し、滑脳症は LIS1 の異常であることが知られている。NDEL1 が細胞分裂時に Aurora-A によってリン酸化されて細胞分裂が進行することを示した。さらに、Aurora-A による NDEL1 のリン酸化が中心体の分離や成熟、細胞分裂の進行に重要であることを示唆した。 著者：Daisuke Mori, Yoshihisa Yano, Kazuhiro Toyo-oka, <u>Noriyuki Yoshida</u>, Masami Yamada, Masami Muramatsu, Dongwei Zhang, Hideyuki Saya, Yoko Y.</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

						Toyoshima, Kazuhisa Kinoshita, Anthony Wynshaw-Boris and Shinji Hirotsune (執筆担当部分：抽出不可)
8	Phosphatidylinositol 3-kinase and Akt participate in the FSH-induced meiotic maturation of mouse oocytes.	共	2004 年	Mol. Reprod. Dev., 69: 77-86.	(抽出不可)	PI3 キナーゼはシグナル伝達経路において重要な役割をすることが知られている。PI3 キナーゼと Akt/プロテインキナーゼ B はマウス卵成熟過程で機能し、分裂装置の正常な機能に関与し、第一減数分裂進行に働いていることを示唆した。 著者：Yumi Hoshino, Masaki Yokoo, <u>Noriyuki Yoshida</u> , Hiroshi Sasada, Hiromichi Matsumoto and Eimei Sato (執筆担当部分：抽出不可)
9	An expressed pseudogene regulates the messenger-RNA stability of its homologous coding gene.	共	2003 年	Nature, 423: 91-96.	(抽出不可)	嚢胞腎、骨変形マウスを特徴とする変異マウスを得て解析した結果、偽遺伝子に生じた変異が原因となっており、さらに、偽遺伝子と相同性のある機能遺伝子の mRNA の安定性が間接的に失われていることを明らかにした。変異マウスの表現形が実際に原因遺伝子によるものかを確認するために、トランスジェニックマウスを作成し解析することにより証明した。 著者：Shinji Hirotsune, <u>Noriyuki Yoshida</u> , Amy Chen, Lisa Garrett, Fumihiro Sugiyama, Satoru Takahashi, Ken-ichi Yagami, Anthony Wynshaw-Boris and Atsushi Yoshiki (執筆担当部分：抽出不可)
10	Requirement of cyclin B2, but not cyclin B1, for bipolar spindle formation in frog (<i>Rana japonica</i>) oocytes.	共	2001 年	Mol. Reprod. Dev., 59: 199-208.	(抽出不可)	アカガエルでは、サイクリン B1 と B2 とでは卵成熟過程における局在が異なり、特にサイクリン B2 は分裂装置に局在することを明らかにした。さらに、サイクリン B2 の合成を抑制すると分裂装置の異常が見られ、サイクリン B2 は分裂装置の形成に関与することを示唆した。 著者：Tomoya Kotani, <u>Noriyuki Yoshida</u> , Koichi Mita and Masakane Yamashita (執筆担当部分：抽出不可)